

俳人協会々報

1963年
7月
No. 4

三十八年度総会記

三月三十日(土) 有楽町の電気クラブで、定刻二時より四十分遅れて、岸風三樓氏司会で開会。水原会長の挨拶の後、司会者一任で藤田湘子氏が議長に指名された。次いで安住敦氏の三十七年度の経過報告及び会計報告、秋元不死男氏より三十七年度の事業報告及び三十八年度の事業計画の報告があった(別記参照)。

三月三十日(土) 有楽町の電気クラブで、定刻二時より四十分遅れて、岸風三樓氏司会で開会。水原会長の挨拶の後、司会者一任で藤田湘子氏が議長に指名された。次いで安住敦氏の三十七年度の経過報告及び会計報告、秋元不死男氏より三十七年度の事業報告及び三十八年度の事業計画の報告があった(別記参照)。

三十七年度

経過報告と会計報告 (要旨)

〈幹事について〉

現在幹事は秋元、安住、石田、石川、

石塚、角川、岸、香西、中村(草)、平畑、福田の十一名であるが毎月一回の

定例幹事会、および臨時幹事会を随時ひらいて、事業の計画運営、会員の選考などにあたっている。幹事は本会創立当時から「自分の間は発起人が幹事となる」という清記に従っているが、これはそのうち機会をみて改選のことにしたい。

〈顧問について〉

創立当時の顧問は、飯田蛇笏、富安風生、水原秋桜子、山口青邨、山口誓子の五氏に願っていたが、その後、中村会長の辞任に伴い、水原顧問を会長に推し、新たに阿波野青畝氏を顧問に迎えた。さらに昨年十月、飯田顧問逝去のため現在の顧問は水原、富安、山口(書)、山口(誓)、阿波野の五氏である。

〈会員について〉

昨年総会の際の会員は百五十三名だったが、その後新たに四十九名の新会員を迎え、現在二百十二名に上っている。この会員数はなお増加の傾向をたどっている。

なおこの一年間の会員の死去は左の通りであるが、顧問、会員の死去に際し

それぞれ協会として弔意を表した。

西東 三鬼氏(三十七年四月死去)
大場白水郎氏(三十七年十月〃)
飯田 蛇笏氏(三十七年十月〃)
伊東 凍魚氏(三十八年一月〃)
目追 秩父氏(三十八年三月〃)

〈会計報告〉

会計年度を本協会発足の三十六年十二月から三十七年十二月までとした。この間の

収入総額 六〇二、六九五円
支出総額 一九九、四八〇円

収入の主なるものは、会費・入会金の三七万六千円(説明の簡略を期するため千円未満四捨五入、以下同じ)俳句大会の剰余金二万二千円(註1)。

支出の主なるものは、協会賞(第一回第二回合せて)四万七千円、大阪における講演会七万円で、差引四〇三、二一五円を次年度に繰り越した。

私見を加えると、この次年度繰り越しの四〇万円は必ずしも多いとは思っていない。事実、協会運営の経費はほんりかかっているのだが、労務費はほとんど無償、その他事務所、事務用品等は有志寄附を受けている現状である。

それで大体協会の運営は、会費収入でまかなっているという勘定になっている。四〇万円の次年度繰越金の内容は入会金と大会の剰余金というように考

えている。でき得れば今後事務所でも借り、事務員でもおいて事業を推進し

・秋元不死男（石川桂郎・平畑静塔欠席）の十名と会長の出席を得て詮考会を持った。

☆その結果、全会員から推薦のあった受賞候補者八十四名とその作品について検討、第二回俳人協会賞は故西東三鬼（対象作品は句集「変身」）に贈ることに決定した。

☆本日、その贈呈を行なうことになり、さきほど夫人に賞が贈られた。

俳人協会 主催
朝日新聞社 後援

第二回全国俳句大会

以上が事業報告の概要であるが、本年行なう事業については、確定のものとして①「第二回全国俳句大会」の開催、②第三回俳人協会賞の詮考並に授賞（十二月予定）であり、懸案としては俳句講演会があり、その他毎月の幹事会で話の出る企画もあるが、まだ決定には至っていない。幹事側としては今年新しい計画を樹て実行に移したいと思っている。

（秋元不死男報告）

香西照雄。当日の参会者は土曜の午後のため遠隔地よりの人がすくなく、四百名ぐらゐ。終つてから、六時より有楽町富士アイズで授賞者四名を囲んで一部の選者並びに当日の全役員が出席し、祝賀兼慰労会が開かれた。出席者二十四名。大会の状況はNHKテレビニュースで放送された。また、大会の模様及び花田氏の授賞が、朝日の十二日朝刊の三面の

挨拶

秋元不死男

トップニュースになり、朝日賞の土屋氏は十五日の朝日の「人欄」で紹介された。また三十一日の朝日の学芸欄に水原会長が「地方俳句の興隆」と題して土屋、佐藤、中原三氏の授賞作を評し、特に熱心な研究グループが核になれば、地方俳句は興隆すると説いた。後に、授賞者六氏の近影、感想を掲げる。

（秀西記）

協会主催、朝日新聞社後援の第二回大会は、五月十一日（土）後一時より、有楽町の朝日新聞社講堂で開催された。司会は岸風三楼氏。一時五分より事業部長秋元不死男氏の選考経過報告を兼ねての挨拶（別記）、次いで一時二〇分より顧問山口青郎氏の「俳人と文章」と題する講演、二時三〇分より水原会長の「主張の対立」と題する講演が各々四〇分あった。

青郎氏は、俳文の歴史を、芭蕉文集などを引用しつつ説き、最後に「俳人は文章も作って下さい」と結ぶ。秋桜子氏は、四日に急逝した久保田万太郎氏を悼むと冒題して、画壇の対立から説き起し、現俳壇の対立へ及び、「他の条件で戦うのではなく、勝ち負けは作品でつけるべきだ」と結んだ。「俳人と文章」は俳句に

掲載予定。「主張の対立」は要旨を別に掲げた。続いて二時四〇分より選評に移り、次記の選者八氏が五分づつ特選句を評した。中村汀女、平畑静塔、皆吉爽雨、大野林火、角川源義、石川桂郎、安住敦（登壇順）。

四時五分より賞状賞品授与に移り、朝日新聞社の小原企画次長より朝日賞が土屋氏へ、会長より協会賞が佐藤、村井、花田の三氏へ渡された。個性マヒの花田氏は壇上へあがれぬので、代つて師の草田男氏が受けとり壇下の母堂に渡すという一こまもあった。なお、賞品は昨年と同じく、朝日賞は楯、協会賞は三つ組の銀盃である。四時二十分閉会。当日出席の選者には登壇者以外に次の四氏があった。星野立子、中村草田男、福田蓼汀、

選考経過の報告を中心に一言ご挨拶申し上げます。

今回の第二回全国俳句大会に寄せられた投句は五千余句に達しました。それを全選者（二十三名）に依り第一次選考を行なうことに決め、三月三十一日から四月一日にかけて東京青山のNHK青山荘に集まりました。その内、当日病気で出席不能の選者、よんどころなき用事で出られない選者、あるいは遠隔の地にあつて上京に差支えのある選者等ありまして次の諸氏により、第一次選考を徹宵して行なつたのであります。

中村草田男・福田蓼汀・平畑静塔・大野林火・角川源義・石川桂郎・安住敦・皆吉爽雨・香西照雄・石塚友二・岸風三樓・秋元不死男。

そして凡そ千余句が予選を通過。これを改めて全選者に廻附。入選二十句。特

選三句を標準に本選をいたしました。その結果が、本日お手元に差しあげました入選作品集の印刷物であります。のちほどこれら入選作品に対する講評がありま

すが、ここで一言、お断り申上げねばならぬことがあります。それは、今回の応募は「春季雑詠」でありますため、他季の作品は選考から除外したということ。実は今回の応募作品には、例えば「雪」の句がかなりありまして、これらは概ね東北・北陸地方の作者であります。中には立派な作品もありまして、同地方の実状も考えますと、規定外の作として取扱うに忍びないものもあつたのですが、これは終に除外いたしました。尚、高浜年尾氏の入選句には特選がありませんこと、橋本多佳子氏は入院中で選ができませんでしたことを併せてお断り申し上げます。

私たちの俳人協会はご承知のとおり俳句の伝統を守りつつ、現代俳句の精華をあげるために組織されておる協会であり

ます。即ち、定型と季語を守る俳人の集まりであります。今回の作品も、前回と同様、この協会の主旨に基いた作品が投

朝日新聞社賞

波来れば鹿尾菜に縋り鹿尾菜刈る

土屋海村



ができましたことをつけ加えて申し上げ

最後に受賞の標準は最高点を得た入選作に朝日新聞社賞を、入選・特選を奨励して高点を得た作に俳人協会賞を贈ることに決定。その成績はお手元の作品集に発表してある通りであります。(要旨)

基準について再検討願えたらと思う。私見ですが、入賞の対象を句に置く場合は特選句に相当のウエイトをつけてもらいたい。それから又対象を人におく場合も考えられる。投句した二句が共に立派に選に入った場合は総合得点を以って、入賞を決めるようにしたら如何かと思う。この基準に拠れば花田春兆さんは立派に朝日賞授賞の資格があったと思う。私見を述べて所感といたします。

(昭和三十年まで鈴木柏葉氏に師事。三十六年より「馬酔木」へ投句)

私の句が入賞するとは夢にも思っていなかった。それだけに入賞の通知に接した時は嬉しかった。喜んで授賞式に参列した私だったが、当日会場で入選句集を手にして、この句が選者先生の特選に一句も入っていなかったことを知った時、なんとなくさびしかった。秋元先生は御挨拶の中で入選点数の多い句を以って新聞社賞に決めたと申されたが、この受賞には内心気がすすまなかった。私は入賞

俳人協会賞

移動峰先づ薩南の野に飛ばす

中原大葉子



ていましてが、不幸にして、当時の俳句が一句もなく、これを機に当時を回想して一途に作ってみる気になったのでした。お蔭で諸先生方に俳句を通してお会いでき、一生の思い出と、厚く御礼申し上げます。

(三十才の時、美濃派の石橋観山に師事四十才の時、同好の士と八天句会を組織し現在に至る)

この道に入って五十年にもなりますが辺鄙な田舎の、しかも出嫌いの癖もあって、所謂井中の蛙、否蚊にしかすぎぬ自分と考えております。八天句会に属し、齢既に古稀をすぎ、毎月の例会を楽しんでいる始末です。

去る三月、東京都内山忍冬雅(戦時中この地に避難されておられた)から新聞の切抜きを送って頂き、全国俳句大会に応募する気になりました。まだ一度の拜顔をできなかった大家の選者名がずらりと並んでいたの、せめて句の上でも、親しくお会いしたいと念願したからでした。

俳人協会賞なんて実は面喰っているのです。只私は、若い頃、蜜蜂飼育に従事し、熊本、久留米、佐賀、鳥栖と転々し

お願い

会員諸兄姉の御希望通

信文を募集します

原稿用紙ハ一枚程度
二〇〇字

俳人協会賞

梅白し 仔牛 今日より 鼻環 持つ

米 倉 真 琴



過去十二年間郷土紙信毎俳壇に投句し
つづけて来た私にとって、今回の受賞は
全く望外の喜びであった。と同時に大き

俳人協会賞

黒髪の長かりし世のひいかな

佐 藤 一 村



ひさしぶりの上京で得た印象二つ——
その一、朝の混雑時の鎌倉駅の整然たる
乗車ぶり。
その二、第二回全国俳句大会の入選句が
いづれも伝統に立脚した穩健な
ものであったこと。
この二つの事象に共通していることは
秩序の美ということであると思う。
諸派合同の全国俳句大会であるからに
は、ある程度の混乱はまぬがれぬものと

覚悟していたところ、事實は、伝統の旗
じるしの下に一絲紊れぬ諧調を示してい
た。わたしはこの二つのものに秩序の美
というものを見出したのである。受賞の

俳人協会賞

小 さ き 研 より 白 魚 の 眼 が な だ れ

村 井 四 四 三 女



たくさん秀れた作品の中で、私の句
は必らずしも光っていない。むしろ、く
じにでも当たったと思って、この幸運をよ
ろこびたい。受賞式に出席できた四人の
内、身体の不自由な花田さんを除いて、

感想を求められたが、それは、ありがた
かったという一言につきる。
(台湾にて句作を始める。ホトトギス及
び笛同人)

三人までが、外地からの引揚者であるこ
と、花田さんとともに、逆境にあつて、
ひたすらこの道にはげんできたものに神
の手がおかれたような気がしてうれしか
った。四人の男の子が、それぞれ大きく
なって、私の心の外に住むようになって
から、私の胎内には「俳句」という、可
愛い女の子が育ちはじめていた。純情可
憐なひとり娘、私はこの子を女だからと
いって、決して甘やかすようなことなく
やさしい中にも一本きりつと筋の通った
純日本娘に育てあげたいと思っている。
(本名村井四四三。夏草会員。菜菔火同
人)

い 本 年 度 会 費 (千 円) 未 納 の 方 は
願 至 急 納 入 し て 下 さ い



壇に上れない車椅子の僕に、草田男先生がわざわざ賞状を中継ぎして手渡しして下さった時、もともと地を踏む足を持ちあわせぬ身ながら、まさに体が宙に浮いたように感じた。有頂天の喜びだったのだ。伝統俳句に志す者として、たとえ全国大会という但し書があるにせよ、俳人

主張の対立

水原秋桜子

私はこれから明治、大正時代の画壇の主張の対立に就て申上げ、それを俳壇における主張の対立に結びつけて見たいと考えたからであります。いま考えて見ま

しても、明治の終から大正の半ばにかけての画壇の渦巻き——各派の主張の対立はすさまじいものでありまして、それだけに骨身をけずるような勉強がくり返さ

れたわけでありませう。

いまの日展の前身が帝展、その前が文展といわれておりましたが、その文展の発足したのが明治四十年のことでありました。当時の洋画部のみに就て申し上げますと、中心になっておりましたのが、黒田清輝をいただく美術学校系で、これには岡田三郎助、和田英作というような教授がおり、少しおくれて藤島武二教授も加わりました。この黒田清輝という人は、後に貴族院に入って政治家となりました。その中でも偉かったのですが、画も実に立派なものが造ってあります。ただ、仏蘭西へ行って勉強したときについた先生がラファエル・コランという人で、これはきれいな画風ではありますけれど、いわば流行画家で、勿論たいした人ではありません。当時は印象派の画家達が、剋苦奮闘の末、巧成り名遂げた時代で、モネも、ピサロも、ルノアールもまだ達者でいたので、どうしてそういう人に就かなかつたものでしょうか。とにかくラファエル・コランの画風が日本につたえられ、それが文展の中心になりましたので、いまでも博物館などであの頃の画を御覧になるとわかりますけれど、きれいごとという感じが多いのであります。

しかし、美術学校を卒業したばかりの若い人達はさすがに潑刺たる作を出品しております。その代表的なものは、いまでも回顧展によく出品されますから、御

覧になった方が多いと思いますが、和田三造の「南風」という絵。荒波の上を走る漁船の上に、逞ましい男が立っており背後に雲をいただいた大島が見えるという——若さのあふれたような絵であります。当時の賞は、いままのように特選というのではなく、一等賞、二等賞という普通の名称のものでしたけれど、結局文展の終るまでに一等賞を得たものは一つもなく、二等賞が最高だったので、この「南風」もその二等賞でありました。和田三造はその次の年にも「焔燼」という画を出品して二等賞を得ております。それは工事場における群像で、うしろに夏の川の流れているような構図のものでありましたが、震災か戦災にでも遇つたのでしょうか回顧展には一度も出品されていないようであります。

そのうちに四十三年に藤島武二が欧羅巴から帰って来ました。この人は仏蘭西で学ばずに伊太利で勉強をしたので、元来男性的の筆がローマで古典を見た為めに儼きあげられ、堂々たる作風をなしていました。このようなわけで、文展の中心になる美術学校系は一応しかりしたものであったのですが、元より在野系とは反りの合うわけがありません。その在野系のもの一つは太平洋画会でありまして、これには中村不折とか、鹿子木孟郎とかいう人が主となっておりました。この人達は、仏蘭西留学中にジャンポール・ローランに就て、アマデミックの

勉強をしたのですから、美術学校系と対立しても、それを「古い」といってけなし得る立場ではありません。もう一つの在野系は、小山正太郎の不同舎という塾で、ここには中川八郎、小杉未醒、吉田博——それに「わだつみのいるこの宮」というあの有名な画を描いて三等賞を得た青木繁という人も居ったわけです。中でも中川八郎は「巖壁」という力づよい名作を描きましたが、これもいまではどこにありますか、私は見ておりません。すべてこれ等の作は私の中学から高等学校時代にかけて見ましたもので、感激の大きかったために、百号、二百号というような大画面として頭に残っておりますけれど、あとで小糸源太郎先生にうかがいますと、もっと小さいものであったようであります。

こんな具合で発足した文展の洋画部はとにかく美術学校系が押えて来たわけでありますが、そのうちに仏蘭西に留学して印象派の大家達から直接に指導をうけた梅原竜三郎、山下新太郎、坂本繁二郎などという人が帰朝して来ますと、忽ちそこに主張の対立がはじまったわけでありませぬ。印象派というのは、官展派に對抗して、明るい光線をあてた新鮮な画風を打樹てたもので、はじめは全く世間を容れられず、四面楚歌の声という状態であったのを、本当に血の出るような努力をして、逆に画壇を風靡することになったのですが、その印象派の洗礼を受けて

帰朝した人達の眼から見れば、美術学校系の画や太平洋画会系の画は実に古くさいものと見えたとにちがいありません。そこで洋画部を第一科、第二科と二分して新らしいものは第二科に収めようという意見をたてたのですが、それが容れられなかったために、その人達は文展を脱退して二科会をつくることになりました。

このときの発起人の中には藤島武二も加わっていたのですが、これは黒田清輝に引きとめられて文展に残ることになりました。しかし二科の方には、間もなく安井曾太郎その他の人が帰朝して加わり、それに小出権重のような俊秀も現われて来ましたので、この二つの展覧会の競争は真に天下分目の戦という様相を帯びて来ました。

もともと仏蘭西の印象派の主張といえますのは、決して油絵の本質を変えてしまうものではなく、時代の移りと共に当然変ってゆくべき道をきりひらいた運動でありました。ただ古い考えを固執している人達から見れば、これは油絵の本質を変えてしまふ運動と見えたくも知れませんが、新しい運動というものは時にこのような見方をされるもので、印象派の運動などは、今から見れば当然起るべくして起り、勝つべくして勝つたものと申せましよう。ですから、この天下分目の戦は、当然二科会の方に勝目が多かったわけでありませぬが、そのうちに梅原竜三郎は独立をしてしまいますし、また文

展の方にも中村彝（つねし）のような名作者が出来ましたので、はっきりした勝負のつかぬうちに、時代は次第に移って行ったとも申せましようか。しかし、天下分目の戦をするということは、芸術家にとっては実に大切なことでありまして近世の日本油画家の中、五指を屈する人といえば誰しも藤島、安井、梅原、岸田中村の五人をあげますが、そのうちの四人はこの戦に参加した人であり、岸田劉生は全く独自の立場にあったとはいっても、これは洋画壇全部を向うに廻して天下分目の戦をしたものということが出来ましよう。

このような具合になっているうちに、二科会の中でまた新しい動きが起りました。これは仏蘭西の野獸派の動きに刺戟されて、若い作者達が立ち上ったものでこれがいまもある独立美術協会を作ったわけでありませぬ。野獸派と申しますのは印象派によつて一応固定された画風にあきたらず、ただ心の赴くままに振舞おうという主張で、はじめその派の展覧の催されたとき、あっと驚いた批評家達が、これは野獸のようなものだといったところから野獸派という名が生れたのですが仏蘭西における事のおこりは相当に古いもので、明治三十八年頃にヴラマンク、ドラン、マチス、ルオーなど、その頃はまだ若かった人々が立ち上ったわけでありませぬ。このうちマチスやルオーは、マルケなどと共に官展派のグスタフ・モロ

1という先生の教室で学んでいたのですが、このモロという教授が偉かったらしくて、ルオーに向つて話した言葉に「変転極りなき現代人の言葉に耳を傾けるな。私自身の言葉にも心を奪われるな。たゞ過去の大家より無限に自得し心静かに自を愛せよ」というのがあります。この言葉が心浸み入った為めでもありましようか、ルオーの画はあのようにどこか古典味を帯びたものとなり、同じ運動をしたドランもやがて新古典派と呼ばれるようになりました。

この明治三十八年に端を発した野獸派の運動が昭和八年になって日本で一派を形成したのはその間に随分年が経つていくことですが、あの時分は仏蘭西に留学した人達の滞在期間が長かつたためにそういうことになったのかもわかりませぬ。とにかく独立美術協会成立の当時の氣勢はたいしたものでありませぬが、これは天下分目の戦にはなりません。というのは、野獸派の動きというのがただ現状を破壊するという目的を持っていただけで、何を作り上げようという建設の目的がなかったからであります。昭和八年にはもうルオーもドランもまたマチスも大家の風格を帯びて、野獸派と呼ばれるにふさわしくない画を描いていましたし、それに日本の野獸派の人々はいいて二科会以来の師匠を引つづいて尊敬しておりました。これでは天下分目の戦になるわけがないと思ひます。

こちらで日本画の方に眼を移して見ましよう。日本画壇における天下分目の戦といえ、なんといっても文展から日本美術院がわかれた時のことでありましよう。これにはいろいろの混み入った理由があったようですが、なんといっても本筋は京都側から出た審査員と東京の岡倉天心直系の審査員との意見が合わなかったのが第一であると思います。もっとはっきり申せば、京都側の方は画の技術に重きを置いており、天心直系の方は画家の精神に重きを置いていたと言えましよう。横山大観の書いた美術院の綱領に、「一切の芸術は無窮を趨うの姿に他ならず。殊に絵画は感情を主とす。世界最高の情趣を顕現するにあり」というのがありますが、これがこの人達の態度をよく語っているものであります。

日本美術院展覧会の第一回は大正三年の十月、三越でひらかれましたが、この時大観は「游刃有余地」という——いまでも回顧展に見かける絵を出品しております。これは庖丁という名の料理人が、文恵君という人のために、牛を料理して見せたときのことを題材にしたので、その料理ぶりの見事さに文恵君が感心して「技というものもこれまで至るものか」といいますと、庖丁が答えるには「私のするのは道であって、技以上のものではない。はじめは牛の身体だけが見えていたが、三年も立つうちに、牛は目に入らなくなつた。今では精神で牛を見て、目で

は見えていない」といった。これが画題になつていたので、大観はじめ美術院の人達の意気がうかがわれると思います。なにしろこの対立時代の初期に安田靉彦の「御産の禱」や、下村観山の「弱法師」や、小林古径の「阿弥陀堂」などの傑作が相ついで出たのですから、実にたいしたもので、この天下分目の戦はどうやら美術院側の勝、少なくとも六分四分位には旗色がよかつたと考えております。

こちらで話を転じて、俳壇のことを申上げたいと思いますが、俳壇での天下分目の戦といえ、なんといっても明治の末期から大正の初期にかけて行なわれた新傾向派とホトトギス派との対抗でありましよう。あのときの新傾向運動は、はじめ今から見て格別のことではなかつたのですが、そのうちに定型を破壊し、季語を無用とする傾向に変わつて来たので事が大きくなりました。しかし、若しもこの新傾向の人達が自分達の作品を「新しい詩」と名付けたならば、天下分目の戦にまで発展しなかつたかも知れません。が、定型を破壊し、季語を無用としてなお且つ俳句と名乗る勢力が大きくなればこれは伝統派としては立ちあがらざるを得ないわけでありましよう。この戦は御承知のとおりホトトギス派の勝利にりました。勿論、虚子先生の指導がよろしかったためでありましよう、作者として渡辺水巴、村上鬼城、原石鼎、前田普羅、飯田蛇笏のような人がいたことも非常に有利

だつたわけでありましよう。その人達のこの当時の句は今でも燦然たる光を放つておりますが、作者としての命をかけた場を踏んだ句というものは、まことに底力のあるものだと思います。

その後、俳壇にはいろいろの変化がありましたし、いろいろの主張もなされたのでありますが、ある場合は新しい主張をした人々が又すぐに分裂してしまつたり、ある場合は別に反応もなく見すごされてしまつたりして、天下分目の戦などは起らずに、最近まで過ぎて来ました。画壇の方も同じことで、油絵では立体主義、超現実主義などがつづいておこりましたけれど、これに対して正面から戦おうという動きはなかつたようでありましよう。そして最近前衛派が現れましよう、これが忽ち画壇にひろがらして、いまではこの展覧会でも前衛派の作品の方が多くなりましたし、そののみか、これが日本画の方にまで影響を及ぼしそうな形勢になつて来ました。私は前衛絵画というものとほとんど興味がありませんのでむかしあれほど楽しみにしていた展覧会を見ることをやめて、ただ好きな画家の個展のみを見るようにしております。しかし考えて見れば、日本の油画の傾向がこういふ風になりましたのは背けないことではありません。と申しますのは、元

来油絵というものが欧羅巴にはじまり、日本の洋画壇はそれを学んだものでありまして、向うの画風が変れば、こちらもそれに影響されるのは致し方ないことだと思ひます。ただ変り方があまり激しくて、誰も前衛、かれも前衛というようになりましようのはいかがかと考えられるのであります。

俳壇でもこの二、三年前俳句が問題にされるようになりました。私もはじめのうちはもの珍らしくて、それを読んで見ましたが、仏蘭西の象徴詩あたりに学んだらしい比喩とか暗喩とかいふことが私にはどうも面倒で、殆ど意味を捕捉することが出来ません。そういう事に時間を費してしまつては大変なので、この頃は全く読まないことにして居ります。私は、油絵が前衛風の動きをして居るのを肯けると思ひましたが、俳句が同じような動きをすることを肯くわけには行きません。それとこれとは全く根本的にちがっているからであります。俳句はいつでもなく日本独特の詩で、その本質の中でも、対象を簡明直截に現わすということとを大切にしているのであります。これはひとり文学ばかりではなく、絵画でも同じで、いわば東洋の芸術の真髓であります。が、とりわけ俳句は、最も短い詩なので、いやはや上にも簡明直截の表現を尊ばなければならぬものであります。さきほど新傾向の俳句のことを申し上げましたが、それと源を同じくして次第に変わつて来た層雲派の作品の中で、尾崎

放哉のものなどには同感するものが少なからずあります。無論あれを俳句と呼ぶこ

とは困りますけれど、「ああいいな」と思って暗記しているもの少なくないというのは、やはりこれが東洋の詩の真髓たる簡明直截の表現をとっていることによるのであります。このことはよく頭に入れて置いていただきたい思います。

前衛俳句には、季語のはいっているものもあり、はいっていないものもありまた定型を守っているものもいないものもあります。ですからこれを一括して、俳句と言わずに、別の詩というならば、少しも文句はない筈です。ただこれが俳句、しかも現代の俳句はこうあるべきだということになりますと、それは困るわけでありますが、この前衛俳句と、われわれの伝統俳句とのあいだに天下目目の戦がはじまりますかどうか、それは全くわかりません。多分そんなことにはならないだろうと思われます。闘志をもつためには、やはり向うから刺戟を受けるのが始まりですが、私自身だけのことを申しますと、全く刺戟をうけることもなく従って闘志も全然ないわけであります。

であります。従って会としての俳句観が統一されておられませんから、これが天下目目の戦にはいるわけはあり得ないと考えるのが当然のことでしょう。

しかし、先日雑誌か何か見たのであります、現代俳句協会の綜合句集が出来たように書いてありました。こうなりますと一般の世間では、こちらでも句集を出しはしないだろうか、そうすれば両方を比べて見たい。両協会の錦を削ることが待たれる——というような形勢になるかも知れません。私はまだこちらで句集を編むという話もきいておりませんが、そういうことは両協会対抗という意味でなくて一つの企画であるとは思っています。しかし、世間とはかく物見高いもので、何か二つの勢力の相鏡のような材料を見出し、それを並べて批判して見たいという気持はうごくと思えます。その場合にこの大会の入選句などはすぐさま例にとりあげられて、俳人協会の作風斯くの如し、と言われたいとは限らぬのであります。私は、いたずらに両勢力が争うことを好みませんが、万々が一にも相争うような立場になるとすれば、その勝敗はお互の俳句の出来によって決まらなければならぬと考えます。他の何ごとによっても勝負が左右されてはいけません。ただ作るところの句がよいかわるいか、批判は現代の有識者に任せ、あるいは多少年のすぎるのを待って決められるべきであります。そうなると私達会員の責任も大き

いことでありますが、投句される方々の御苦勞も大へんなことで、又それだけに勉強のなざり甲斐もあるわけであります。幸い今回の成績は前回以上であるという意見に一致しておりますのは御同慶の至りでありますが、今後年々氣力を新たにされて、大会の催される度毎に「伝統俳句の精華ここに在り」と誇れるような作品を見せていただきたいと希望する次第であります。

(五月十一日、俳人協会全国大会講演より抜萃)

連絡

一、住所電話の変更は、その都度お知らせ下さい。

二、消息欄の資料として、左のことをその都度お知らせ下さい。

○全員関係の俳誌創刊及び廃刊。また俳誌の記念大会などの大きな行事。

○会員の方の句集その他の著作(発行所、発行年月、価格を併記のこと)

○会員の方の結社賞などの授賞のニュース。

三、次号は、地方会員の声の特集を予定しています。

四、同時配布の大会選句集で、授賞者土屋海村氏の「海」が「梅」と誤植されています。訂正されたく。

消息

○左の会員が逝去されました。つつしん

で哀悼の意を表します。協会より弔電及び香尊を遺族にさしあげました。

一月廿二日 伊藤 凍魚氏
三月十八日 目迫 秩父氏

五月廿七日 橋本多佳子氏

○幹事石田波郷氏が充墳球排出手術のため五月末都下清瀬町の東京病院東療病棟南五寮に入院されました。

○五月四日 「若葉」四百号記念大会於一ツ橋講堂

○五月六日 「風花」十五周年記念大会於八景園

○五月廿七日 水原秋桜子著「蕪村秀句」出版祝賀会 於ステーション・ホテル

○六月五日 顧問山口誓子氏が羽黒山俳句大会出席の帰途東京に立寄られました。

俳人協会々報 (昭和三十八年七月 四 号)

編集兼発行人 大野 林 火

印刷人 竹内 昌 巳

東京都千代田区富士見町二ノ七

俳 人 協 会

電話九段(四)〇一一一番